

サラワク州バラム川中流域におけるローカルマーケットからみた森林資源利用

加賀道（アジア・アフリカ地域研究研究科）

はじめに： サラワクでは古くから林産物交易が行われ、内陸部に暮らす人々も、採集者、第一交易者として活躍してきた歴史を持つ。現在、森林資源は内陸部に暮らす人々にどのように利用され、どのような役割を果たしているのか。本調査では、ローカルマーケットでの林産物取引から森林資源の動態を明らかにし、また当地域に暮らす人々の森林利用についての特色を明らかにすることを目的とした。

調査地と方法： 2005年2-3月に、サラワク州バラム川中流域のロング・ブディアン村（カヤン人）のマーケットにおいて、取引される林産物名、農作物の量、価格、品物を持ち寄った人の村などについて記録をおこなった。また、周辺地域の木材伐採道路の広がりや、マーケットに集まる村々の位置、規模などについての情報収集も同時におこなった。

調査結果： マーケットに頻繁に集まり取引を行っている村は、17村のうち2村が焼畑農耕民といわれてきたカヤン人（1村はマーケットが立地している村）、他15村が狩猟採集民といわれてきたプナン人であった。尚、狩猟採集活動をおこないながら森林での移動生活を行っていたプナンは現在ほとんどが定住・焼畑稲作を行っており、調査地においては1集団のみが未定住であった。これらの村々は、マーケットを中心として半径約40kmに位置していた。調査期間中に、計54品目の農・林産物がマーケットに持ち込まれた。そのうち39品目が林産物であった。持ち寄られた各品目について、その量と持ち込んだ村からの考察をしたところ、栽培作物については、そのほとんどがカヤン人によるものであり、また林産物、特に手工芸品については全てプナン人によるものだった。また、当地域における村の分布位置からの考察では、生ものである獣肉などは、マーケットから半径20km以内から持ち寄られ、沿岸部まで流出する沈香や胃石などの高価な林産物についてはマーケットから離れた村々から多く持ち寄られていた。

考察と課題： 近年、商業的な森林伐採が盛んになるに連れ、地域内の交通網が発達してきた。それを受け、内陸部に暮らす人々の行動範囲が拡大し都市部への人々の流出が盛んになる一方で、内陸の地域内においても近隣村との交流が容易に行われるようになり、ローカルマーケットが地域住民に利用されるようになった。林産物については、持ち寄られる品目や種類ごとに森林資源の集まる範囲が異なることが明らかとなった。マーケットから離れた村からは単価の高い林産物や、原生林的森林で採集しやすい沈香、胃石などが持ち寄られていた。今後、当地域における森林資源やローカルマーケットの存在について、伐採の影響、世帯収入における森林産物への依存度、各村周辺の生態環境などと比較検討を行いながら、その価値を評価してゆきたい。